
MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 <14>

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 3『WOLF MEET VAMPIRE』<14>

【Zコード】

Z2857M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

オフィスの友人 貴史を何者かによって殺された秀。その相手とは吸血鬼ヴァンパイアだった。友人の復讐のために『闇』の力を引き出す秀 - - -

MOONシリーズ『WOLF MEET VAMPIRE』第14
話です。

『WOLF MEET VAMPIRE』 v1.4 (前書き)

長いですが、お付き合いでお願いします。

<14>

さやかと信一は、次の撮影の打ち合わせのために、秀のマンションを訪れていた。

アイ・ポットをアイボリー色をしたスラックスの膝の上に開き、「『MONA』の今年の秋服のテーマは『Close To Me』、”永遠に側にいて”よ。この間のミーティングで話したわよね。」

「ああ……」

秀は心ここにあらず、といった感じで答えた。

そんな彼に気を止めた風もなく、

「クライアントからのモデル指名は、特にないわ。私たちに任せることで。」

「問題は、そのモデルだな、秀。」

信一は頭の後ろで腕を組み、「日本の一流どじろはほとんど使つちまつたし……新人を使うつて手もあるが……」

「駄目、使えないわ、駆けだしは。」

さやかは強く反対した。「『MONA』の秋服の発表はイタリアを封切に

プレタポルテよ。日本の新人じゃ、太刀打ちできないわ。身長も足りないし。」

「それじゃ、仮人でも使えばいいだろ。」

秀は初めて打ち合わせの席で、発言をした。「シャンゼリゼ通りを一日中歩いてれば卵でも駆けだしでも5・6人は見付かるだろうが。」

「それがね、駄目なのよ。」

さやかは一つ大きな溜息をついた。

「モデルはうちらに任せせるって言つてるけど、一つだけ条件が付

けられてね・・・東洋美^{ヒキセントリック}でいきたいんですって。ほら『MONA』つて今までどちらかといふと、マドモアゼル系だつたじゃない?仏系や伊系を多くつかつて。一度米系を使ったことあつたけど、あたりの宣伝効果で終わつちゃつたからクライアントも懲りちやつてるのよね。

「確かに、『MONA』のイメージは”マドモアゼル”に定着しそぎてるな。」

信一が同意する。「あれじゃ、新地開拓は望めない。客層も自然固定されるし・・・・・・」

「そう・・・そうなのよね、彼らの心配ことは。だから、ここで心氣一転?

『女性』でもない『少女』でもない・・・極端に言つちやえれば『女』でもない『男』でもない中性的な魅力を出したといつていうのよね。」

「まるで宝塚の世界だな。」

秀は思い余つたかのように白い天井を眺めた。「逆に今の日本のファッショնの流れは女性は女性らしく、男性は男性らしく、だからな。どこのプロダクション覗いたって、身長はあってもそんな条件を備えた奴・・・・・・・・」

そこまで言って、ふいに口をつぐむ秀。

記憶の中で一人の青年が振り返る・・・・・・

(あいつなら・・・和人ならきっと・・・・・・)

「どうしたの、秀?誰か心当たりでも?」

「・・・・・いや。」

秀は苦笑して頭を振つた。「・・・・・佐伯 香でいい。彼女は丁度仏系ハーフだし、タツパも度胸もある。ミラノのステージを踏んだ経験もあるから、うまくいくだろ?」

「あ、成程ね。」

さやかは明るい笑顔で彼の案に相槌を打つた。「彼女なら、まだうちのオフィスで使ってないわ、ラッキーな事に。」

「じゃ、早速スケジュール調整だな、秀。」

信一がさやかの入れたコーヒーを一気に飲み干し、明るい表情で秀に声をかける。

「あと、よろしくな信一。」

彼は急に席を立ち、玄関へと向かった。

驚いた信一が、

「おい、秀一どこへ行くんだ……オフィスでの打ち合わせに参加しないのか？」

「そうよ、チーフがいなくてどうするのよ。」

秀のいつもの気まぐれが始まつた、とでもいうかのようだ、ふくれつ顔のさやかが抗議の声を発する。

「悪いね、ちょい野暮用があつて。」

「もう夜の11：00なんだけど？」

「『24時間働けますか？』がモットーの秀さんだから。」

皮ジャンを抱えた秀が、玄関から顔だけこちらに覗かせる。「貴史の穴は『ガルボ』の佐伯俊に埋めてもらえ。話はもう通してある。それから、佐伯香とのスケジュール調整の件、マネージャーを通じて5月末から2週間キープしといた。あとは、直人に青写真撮つてもらつて、詰めてくれ……アングルと照明には十分注意しろよ、相手は仏・伊だ。」

「え……」

ばたん・・・・・・

茫然とする2人の目の前で、鉄の扉は重い音を立てて閉じられた。

「・・・・・悪いな、みんな。」

屋上へと通じる階段をゆっくりと昇りながら、秀は呟いた。仲間たち一人一人の姿が目に浮かぶ。

「もう……お前たちの所へ戻れないかもしね。」

最後に、貴史の笑顔が浮かんだ時……

卷之三

屋上の扉が、秀の手によつて開かれた。

強い上空の風か、彼の黒髪を揺しめかせる。

黒川山房文庫

長いこと秀は、その青白い光を満身に浴びたことはなかつた。もう一人の『自分』を自覚めさせるその『月光』を、秀は今まで避けて來た。

それを―――彼は今再び浴ひよ／＼としている

吹き付ける夜風に身を任せ、思う存

日本書紀傳 卷之三

「我就是想說，你這個人，真該死！」

月が。

彼の願いに答えるかのように、一瞬大きく揺らめいた。

卷之三

光の洪水の中で、秀はゆっくりと目を開いた。

前方の闇を見つめる、その赤い輝きの瞳。

ニシカニ思ひが

「今度は容赦しねえ。」

「吸血鬼ども。」

右足を軸に、天空へと飛翔する秀 - - -

従の体は新宿で、お風呂入るやうに

『WOLF MEET VAMPIRE』 v1.4 (後書き)

感想があつましたら、お願いいいたします。
あと、2・3話で終わりです（・・・・・）って次のプロジェクト
立てなくちゃ（爆死）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2857m/>

MOON-3『WOLF MEET VAMPIRE』<14>

2010年10月21日23時00分発行